# かささぎ通信　第123号

毎月第2金曜日 13：30〜15：30　　2023年　3月　10日　発行

刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」


**二〇二三年二月の「森三郎の作品を読む会」では「一人相撲」（『赤い鳥』[1933.7]所収作と少国民文芸選『かさゝぎ物語』[1942.8]（帝国教育会出版部所収作）の読み比べをしました。**

「一人相撲」については「かささぎ通信」32、90、91号で取り上げてきました。江戸時代の寺子屋（森三郎作品では「寺小屋」）に通う少年庄太の話です。寺子屋の帰りに棒紅を買ってくるように叔母さんに頼まれた庄太は、一人では心細いので勘ちゃんに一緒に行ってもらいます。途中、一人相撲の人だかりに気づいた勘ちゃんが駆け出して見に行くので、庄太も止む無く付いて行きました。しばらくおじいさんの一人相撲を見物していましたが、叔母さんに頼まれたことが気になって、紅屋へ行きます。その時、お金の入った腰の巾着が切り取られていることに気づきました。勘ちゃんが一人相撲なんかに寄り道するから悪いんだと思うと憎らしくて、勘ちゃんと口もきかずに家に帰ってきました。

大人たちが夢中になって取り囲む大道芸の一人相撲の面白さがよく描かれています。これは「かささぎ通信」90号で紹介したように、森三郎の兄・銑三の「大道芸のはなし」（初出：雑誌『今昔』一九三三年二〜四月号）にある「独相撲」を素材にしています。作者の森三郎は、次第に人だかりが増えて、ひいきの力士の側に投げ銭をして声援する大人たちの様子を臨場感いっぱいに描いています。一緒になって思わず見入っていた庄太が巾着切りにやられるのも無理からぬ様子が分かります。

家に戻ると叔母さんは留守でしたが、庄太はお母さんに正直に話しました。お母さんからは、いくら叔母さんに頼まれても、子どもだけでもうそんなところへ買い物に行ってはいけないと注意されただけですし、おばさんからも何も言われませんでした。庄太は叱られなかったことで、むしろ自分の行動を振り返って、さっき勘ちゃんばかりが悪いように思って、勘ちゃんにつっけんどんにしたことを後悔します。「大道芸のはなし」が見事に子どもの心の葛藤の物語に生まれ変わっています。外では勘ちゃんたちが夕暮間近の空に向かって「こうもり、こォい」とどなって遊んでいる声がしています。

『赤い鳥』次の号、一九三三年八月号「ひとりつ子」（名義：谷井綱之）にも同じ様な表現があります。呉服屋の息子の慶一は三歳上の小僧さんの新どんに何かと言いがかりをつけていますが、慶一がいじめられているのを見た新どんがかばってくれます。子どもたちが「ざうりかァくし、九年母・・・」と歌っている声を聞きながら、慶一は新どんと一緒に家に帰ります。「慶一は、さつき新どんをいぢめたことを思ふと、一人ではづかしくなつて、だまつて、うなだれて歩きました」という文章で、主人公の心の変化が示されています。

「一人相撲」の場合も「ひとりつ子」の場合も、他の子どもたちの屈託なく歌うわらべ歌の響きを背景にして、ささやかな経験から少しずつ成長していく少年の姿を森三郎は描いています。

ところで『赤い鳥』掲載の「一人相撲」を読んだ時、叔母さんが棒紅を買って来てと庄太に頼む設定が少し不自然だと感じたことがあります。「紅ぐらい、ここいらの店で買ったって同じことじゃないか」と言う庄太に対し、叔母さんは「あの店の棒紅でなくっちゃだめなの」と言います。そんなにこだわりの紅を少年に頼むことはいかにも不似合いです。一人相撲の見物という話への展開を考えると、これは庄太にとって非日常の世界へ誘う道具立てだったのだと分かります。おつりで飴ん棒を買ってもいいからという言葉で庄太はお使いを引き受けることになったのですが、紅と飴ん棒という取り合わせが何とも滑稽です。今回少国民文芸選『かさゝぎ物語』版で「一人相撲」を読むと、叔母さんが庄太に叱ったりしなかったのは「内証で庄太をお使いにやったことが分つてしまったので、お母さんに対して気まづいのです」という一文が追加されていて、家族関係などの背景を皆で想像し、話が盛り上がりました。

**次回予定　二〇二三年四月十四日（金）午後一時半〜三時半**
**読み比べ「めぐりあひ」（『赤い鳥』[1934.8]所収作と『かさゝぎ物語』帝国教育会出版部[1942.8]所収作）**